ポール・クローデルと第一次世界大戦

プロパガンダと『1914年聖誕祭の夜』における戦争と信仰

上杉 未央

はじめに

第一次世界大戦中、ポール・クローデル(1868–1955)は「銃後」に留まり続けた。前線に赴いたアポリネールらと異なり、『戦争詩集』(*Poèmes de guerre*)、『1914年聖誕祭の夜』(*La Nuit de Noël 1914*)をはじめとする同時代の戦争を題材としたクローデルの文学作品は、実際の戦場を知らないがために、同時代の言説の紋切り型に支配され[1]、その描写は抽象的で、過度に図式化、単純化されているとの評価を受ける[2]。

しかしながら、戦時中のクローデルの外交官としての職務を思い起こしてみると、上記の評価とは異なる解釈ができるのではないだろうか。ここで彼の戦時中の任務を概観してみよう。クローデルは開戦を機にドイツ、ハンブルクを離れた後、1914年8月末より広報部(Bureau de presse)に配属され、戦争にまつわる情報収集とプロパガンダ作成業務に従事した。1915年2月、外国におけるフランスのプロパガンダカトリック委員会(Comité catholique de propagande française à l'étranger)結成の調整を外務省代表として行い、信仰と愛国心を軸としたプロパガンダ写真集の発行に関与した。1915年4月より、中立国であったスイス、イタリアにフランスとの連帯を意識させ、参戦を促す目的で[3]、『信仰、自然、祖国の詩』と題した連続講演会を開催する「プロパガンダ旅行」を行った。1916年、ローマで鉄道建設の調査任務に従事した後、1917年1月以降の二等全権公使としてのブラジルでの業務の中には、現地の世論をフランスの味方につけるプロパガンダ活動が含まれていた。

フランスにおける第一次世界大戦の意義を熟考し、提示し、戦争にまつわる言説を公の身分で作り出す立場にいたからこそ、戦争を構造として捉える方法が同時期に作られる文学作品にも少なからず影響を及ぼしているのではないだろうか。また、開戦後、「神聖同盟(Union Sacrée)」をスローガンに、挙国一致体制で戦争を闘うにあたり[4]、1905年の政教分離法成立以後、「迫害」状態においていた教会と「復縁」する必要に迫られた[5]政府は信仰者であるクローデルを利用している。共和国の概念の根幹をなすライシテの原則への大きな例外である教会と共和国のこうした接近の機会に、クローデルはどのように立ち回ったのであろうか。本論ではクローデルが開戦直後に携わったプロパガンダ作成業務の総体を明らかにした上で[6]、フランスのプロパガンダカトリック委員会の仕事の時期と執筆時期が重なり、かつ、主題を共有する戯曲『1914年聖誕祭の夜』(以下、『1914年』と表記)を取り上げ、「神聖同盟」の動きの中でこの戯曲をどのように捉えることができるのか検討する。第一次世界大戦の経験は、クローデルにとって、信仰者、外交官、詩人という複数の肩書きの折り合いのつけ方について変化をもたらしたことにも注目したい。

1 外交官が見る戦争:クローデルとプロパガンダ

1.1 プロパガンダ戦争:プロパガンダ『ドイツの野蛮』作成

第一次世界大戦は開戦当初の予想に反して長期化する。この戦争は人員と経済力の総力戦となったばかりではなく、自国民、他国民の意識をも操作する心理戦の様相を呈する。熾烈な心理戦が展開された背景としては、第一に、情報伝達技術が発達したこと、第二に、対立する中央同盟国と連合国が、非参戦国、中立国を己の陣営に取り込む必要があったことが挙げられる[7]。軍事的、政治的側面だけではなく、中立国がそれぞれの陣営に対して抱くイメージもまた、中央同盟国と連合国の均衡を破るに十分な効力を有していたのだ。このような背景の元、1914年8月3日の開戦後、戦争省との協力のもとに設置された外務省の広報部が外交や軍事に関わる情報収集とその検閲[8]、プロパガンダ作成業務を負った。8月末、クローデルはベルトロ[9]とともに政府の疎開先のボルドーへ赴き、この部署で働くことを命

[1] Paul Claudel, *Théâtre,* t. II, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2011, p. 1508.
[2] Christopher Flood, *Pensée politique et imagination historique dans l'œuvre de Paul Claudel,* Annales littéraires de l'Université de Besançon, Belles Lettres, 1991, p. 146.
[3] Eve Francis, *Temps héroïques,* Gand, À l'Enseigne du Chat qui pêche, 1949, p. 304.
[4] Raymond Poincaré, *Au Service de la France. L'Union Sacrée,* t. IV, Plon, 1927, p. 543–548.
[5] 1914年8月2日、内務大臣マルヴィは修道会の運営する学校の閉鎖と教育に従事する聖職者の国外追放を命じた1904年の法律の効力停止を命じた。これに伴い、国外に追放していた聖職者らも徴兵した。
[6] プロパガンダ業務についてはフラッドの著作で論じられるのみである。しかしながら、フラッドはプロパガンダ冊子の作成の背景とその過程を検討していない。また、クローデルが関ったテクストが共同作業の上に作られていた点に対する注意が不十分であり、『戦争と信仰』をクローデル一人の手によるものとする議論には疑問を投げかけざるを得ない。Christopher Flood, *Pensée politique et imagination historique dans l'œuvre de Paul Claudel, op. cit.,* p. 146–160.
[7] Jean-Claude Montant, « L'organisation centrale des services d'informations et de propagande du Quai d'Orsay pendant la Grande Guerre », *Les Sociétés européennes et la guerre de 1914–1918,* Jean-Jacques Becker et Stéphane Audoin-Rouzeau (dir.), Nanterre, Publications de l'Université de Nanterre, p. 135–136.
[8] 外務省の広報活動については以下を参照。*Les affaires étrangères et le corps diplomatique français,* t. II, Jean Baillou (dir.) , Éditions du CNRS, 1984, p. 334–346.
[9] Philippe Berthelot (1866–1934) : 1903年、極東使節として中国を訪れた際に出会って以降、外務省内でのクローデルの後ろ盾となった。本省内の重要ポストを歴任し、事務総長をも務めた。

じられている[10]。

開戦直後、ムルト＝エ＝モゼル地方がドイツ軍により甚大な被害を受けた後、8月21日にフランスは、民間人への攻撃を禁ずるハーグ陸戦条約の加盟国に対してドイツ軍を弾劾する見解書を送っている[11]。国際法の見地からドイツ軍の行動が正当化できないものであることを訴えるためである。一方ドイツは1870年の普仏戦争時のフランスの義勇兵の記憶を喚起することでドイツ国民の恐怖心を煽り[12]、民間人の「抵抗」の背後にフランス、ベルギー政府と聖職者の関与があることを主張し、民間人への集団的制裁を正当化する。

日記の記述[13]、同僚の証言[14]、クローデル自筆の献呈の辞があること、またその装丁から[15]、クローデルが執筆したと推定される、1914年11月発行のプロパガンダ冊子『ドイツの野蛮』(*La Barbarie allemande*)[16]はハーグ陸戦条約に依拠した8月21日付のフランスのこの見解書と内容を同一とする。『ドイツの野蛮』は、資料の提示に重点が置かれ[17]、筆者の言葉は最小限に留められる。開戦を擁護するドイツの「93人の知識人宣言」[18]に言及した後に、「彼ら[ドイツ人]が実際に行っていること」として、フランスやベルギーの民間人に対する殺戮、略奪行為についてのドイツ人兵士の日記の抜粋を掲載し、そこにはドイツの大義と実際の行動の乖離を客観的に浮き立たせようという意図が顕著である。外務大臣デルカセが11月14日付で外務省職員に宛てた通達で、ドイツの反仏プロパガンダに対抗するにあたり、客観的「真実」をもって「公正な判断」を促すことをフランスのプロパガンダの方針として示しており[19]、『ドイツの野蛮』はまさにこれに則ったものである。

1.2 反教権的フランス像への対策：プロパガンダ写真集『ドイツの戦争とカトリシズム』の作成

しかしながら、フランスはプロパガンダ戦で後手に回っていた。ドイツが中立国を対象として行ったプロパガンダは、とりわけカトリック教徒に対して成功を収め、ノール、シャンパーニュ地方が蒙った甚大な被害は、政教分離を進め、教会を迫害したフランスに対する神罰とみなされ、ドイツの勝利を望む声さえあがった[20]。フランス政府はカトリックの中立国の世論に早急に対応することが求められ、1914年11月、外務省が二つの雑誌[21]を創刊するが、発行元であるフランス政府の非宗教的なイメージはカトリック教徒の世論を味方につけるには障害となる[22]。また、敵国をおおいに攻撃するプロパガンダを普及させる場合、政府の関与は伏せられる傾向にあった[23]。この問題に関して、同年の秋、プロパガンダ作成の協力者ダンピエール[24]がクローデルに相談している[25]。クローデルが同僚に通達を出し、中立国におけるプロパガンダの効果的な普及法について意見を求めたのも同時期だと推定される[26]。

年が明けるとカトリック教徒をめぐる状況はより緊迫する。1915年1月22日、教皇ベネディクト15世は教皇庁の徹底した中立性の維持を再度宣言している[27]。交戦国、中立国の中で加害者と被害者とを区別しないことを意味するこの宣言は「キリスト教の精髄」を体現するランス大聖堂や、キリスト教の英知を保管するルーヴァン・カトリック大学図書館などに甚大な被害を蒙ったフランスとベルギーのカトリック教徒を落胆させた[28]。フランスは教皇庁を通じた世論操作を諦めざるを得ず、具体的に対策を講じる必要に迫られる。

1915年2月初旬、政府は宗教的プロパガンダの製作と普及のための具体的な計画を開始する。クローデルは外務省の代表に選ばれ、この計画に加わる。元来、1886年に回心をとげたクローデルは、自分の信仰とそれに伴う文筆家としての活動を外務省が問題視していることを気にかけていた[29]。1912年7月よりおよそ1年間、クリシー教区の会報にて政府の反教権主義を批判する際も、匿名を貫き、身元が割れることを恐れた。1915年のこの宗教的プロパガンダ編集は、それまで外務省内で持て余されていたクローデルの信仰者としての側面が、初めて評価される絶好の機会となる。

2月4日、クローデルが面会に訪れたのはパリ・カトリック学院校長のボードリヤール卿[30]であった。開戦後、ボードリヤール卿はフランスの教会を代表する「声」をつとめていた人物であり[31]、ローマ教皇庁と

---

[10] 同僚にはアレクシス・レジェ［サン＝ジョン・ペルス］、アンリ・オップノらがいた。

[11] « Les Atrocités allemandes », *Le Temps,* 22 août 1914.

[12] Alan Kramer, « Les Atrocités allemandes, mythologie populaire, propagande et manipulations dans l'armée allemande », *Guerre et cultures 1914–1918,* Armand Colin, 1994, p. 49–59.

[13] Paul Claudel, *Journal,* t. I, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1962, p. 300.

[14] オップノによれば、クローデルが執筆した「小さな冊子」の内容は「ドイツの残虐行為を非難し、同盟国の正当な権利を論証」するもので、字体に変化をつけて工夫していたとあり、『ドイツの野蛮』の内容と形式に一致する。Henri Hoppenot, « Claudel tel qu'il fut à Rio … », *Le Figaro littéraire,* 23 mars 1961.

[15] フランス国立図書館所蔵の冊子には1914年11月24日付でクローデル自筆の献呈の辞が書かれており、献呈を受けた人物は装丁する際に背表紙にクローデルの名前を刻ませている。

[16] この冊子は先行研究において言及されていない。

[17] ハーグ陸戦条約の抜粋が別紙で添えられた。

[18] 1914年10月4日発表。

[19] 以下に引用。Jean-Claude Montant, *La Propagande extérieure de la France pendant la Première Guerre mondiale. L'exemple de quelques pays neutres,* thèse soutenue à Université Paris I, 1988, p. 170.

[20] 以下を参照。 Jacques Fontana, *Les Catholiques français pendant la Grande Guerre,* Les Éditions du Cerf, 1990, p. 330–331 ; Xavier Boniface, *Histoire religieuse de la Grande Guerre,* Fayard, 2014, p. 131–137.

[21] *Bulletin des Français résidant à l'étranger, Bulletin de l'Alliance française.*

[22] Yves de Brière, *Luttes de l'Église et Luttes de la Patrie,* Beauchesne, 1916, p. 258.

[23] 先述の『ドイツの野蛮』も同様の理由で発行元は公には隠匿された。Jean-Claude Montant, *La Propagande extérieure de la France pendant la Première Guerre mondiale. L'exemple de quelques pays neutres, op. cit.,* p. 173.

[24] Jacques de Dampierre (1874–1942)：国立古文書学校にてアンティーユ諸島の歴史資料研究で博士号を取得後、『ドイツと人間の権利』(*L'Allemagne et le droit des gens,* 1915)をはじめとするプロパガンダの執筆やメーヌ＝エ＝ロワール県の県会議員を務めるなどした。以下を参照。André Martin, « Chronique », *Bibliothèque de l'école des Chartes,* n°107, 1948, p. 173–174.

[25] Alfred de Baudrillart, *Les Carnets du cardinal Baudrillart 1914–1918,* Paul Christophe (éd.), Éditions du Cerf, 1994, p. 147.

[26] クローデルは12月初旬にボルドーを離れた。通達の発信元はB、すなわちボルドーである。Paul Claudel, *Supplément aux Œuvres Complètes,* t. II, Lausanne, L'Âge d'homme, « Centre Jacques-Petit », 1991, p. 49.

[27] 1914年11月1日発布の回勅Ad Beatissimiが教皇庁の中立性を表明した最初のものである。

[28] 例えば1915年1月6日付の『ル・プティ・パリジャン』紙では、ある匿名のベルギーのカトリック教徒が教皇の態度に不満を募らせている。« Le Pape et les catholiques belges », *Le Petit Parisien,* 6 janvier 1915.

[29] 1909年の上演拒否に関して、ジッド宛の手紙で以下のように説明している。「宗教的な見解のせいで既に私はよく思われてない上、ベルトロが私の唯一の支えである外務省が、この上演［『乙女ヴィオレーヌ』］を好意的に思うとは到底考えられません。ほんの少しの名声のために、自分の立場を危うくするわけにはいかないのです。」Paul Claudel et André Gide, *Correspondance,* André Blanchet (éd.), Gallimard, 1949, p. 99.

フランスのカトリック教会の仲介者の役割を果たしていた[32]。この聖職者は1914年9月、講演『ランスにおけるフランスの魂』の中で「教会の長女」としてのフランスの使命を喚起する他、クローデルの『ドイツの野蛮』と似た論旨を持つ記事を11月18日付『ラ・クロワ』紙に発表している。愛国主義とカトリシズムが折衷されたボードリヤール卿の戦争観は政府の思惑に一致していた。また、クローデル自身の告解師であった点[33]が人選に多少なりとも影響を与え、政府と教会の「神聖同盟」を実現するにあたり、最適な人物であったと考えられる[34]。

クローデルとボードリヤール卿は、同日、政府の資金提供[35]のもとに写真集と論集を出版することと「フランスのカトリックプロパガンダ委員会」の結成を取り決めた[36]。この際、クローデルは「教会に対するドイツの行為とフランス人兵士の敬虔さ」を表す写真をボードリヤール卿に渡している。こうして1915年4月に刊行されたのが写真集『ドイツの戦争とカトリシズム』(*La Guerre allemande et le catholicisme*)である[37]。この共同作業におけるクローデルの貢献度を把握する際、クローデルのアルシーブに残されていたタイプ原稿『戦争と信仰』[38]と写真集『ドイツの戦争とカトリシズム』との関係を明らかにしなければならない。『戦争と信仰』はダンピエールが執筆し、クローデルが加筆修正した[39]。一方、写真集はボードリヤール卿が題名や構成を練った痕跡があるが[40]、文章は同じくダンピエールの手によるもので、クローデルが修正を行った[41]。両者とも、(1)ベルギー、フランスの被害、(2)破壊された聖像や宝物、(3)戦争における神の摂理、(4)フランス軍と教会、と、章立てを同じにする。『戦争と信仰』に出版された形跡が見られず、文章の一部は同一である点から、『戦争と信仰』は『ドイツの戦争とカトリシズム』の下書きであり、ボードリヤール卿に手渡されたと推察できる。政府が立案した企画とはいえ、反教権的な主張は政府の中でも根強く[42]、護教的な内容のプロパガンダを公に発行することには困難を伴っていたことは想像に難くなく、そのために、共和国の公務員であるクローデルは一歩引いた形で計画に参加していたと考えられる。

ここで、クローデルの加筆、修正部分に注目すると、クローデルが手を加えているのはドイツの野蛮性を際立たせる効果を持つ部分に集中していることがわかる。第一に、ドイツの行為の野蛮性を断罪する冒頭、トール(雷神)に体現されるキリスト教成立以前の野蛮性をドイツが取り戻すと予言するハイネの『ドイツ論』の一節を引用し、「巨大な破壊者」のイラストを添え、開戦は「その予言が的中した結果である」と書き添えた[43]。第二に、ランス大聖堂の破壊がドイツにおいて「歓喜の叫び」を呼んだことを描いた詩を掲載し、ドイツ人の残忍性を強調する[44]。第三に、1864年発布の教皇ピウス9世の誤謬表を論拠に、物質主義を尊重し、愛国主義によって犯罪行為を正当化するドイツの罪深さを弾劾する[45]。このプロパガンダがカトリック教徒を対象とすることを思い起こすと、カトリック教会の見地からのドイツ批判は理に適い、世論をつかむにはより効果的といえるだろう。あくまで、他者の発言の引用に依拠する客観的なやり方は先述のフランス政府の方針に忠実に沿っている。

以上の共同作業は「迫害」状態に置いていた教会に政府が協力を要請した点において「神聖同盟」を象徴する出来事であった。写真集は国外において大いに反響を呼んだ[46]。写真集における政府の関与は隠され、編集欄にはクローデル含めて政府の関連人物の名前は掲載されず、読者にその関与は気づかれなかった[47]。「フランスのカトリックプロパガンダ委員会」は、以後も定期的に政府の援助を受けつつ[48]、世界各地でプロパガンダ冊子を出版し、ボードリヤール卿は講演や会談を中心としたプロパガンダ旅行を行い、フランスのカトリックの声を全世界に届けた[49]。クローデルはおそらく共和国の公務員という立場を案じる慎重さのために[50]中心的な役割を果たさず、主たる

---

[30] Mgr Alfred de Baudrillart (1859–1942) : エコール・ノルマル在籍時はベルクソン、ジョレス、デュルケームらと同級生であった。歴史学の指導資格と文学、神学の博士号を取得後、高校で教鞭を執る。1889年に叙階。1907年、パリ・カトリック学院の校長に着任。1918年、アカデミーフランセーズ会員に選出。1935年、枢機卿に任命。

[31] 以下を参照。Yves Marchasson, « Mgr. Baudrillart et la propagande catholique française à l'étranger pendant la première guerre mondiale : l'exemple de l'Espagne », *Humanisme et foi chrétienne,* Charles Kannengiesser et Yves Marchasson (dir.), Beauchesne, 1976, p. 71–90.

[32] 政教分離政策に伴い、政府は1904年にバチカンのフランス大使館を閉鎖しており、教皇庁との直接的なコミュニケーション手段を欠いていた。バチカン国務長官ガスパリ枢機卿の要請で1914年12月、ボードリヤール卿はローマに赴き、パリ・カトリック学院の援助や教育の問題のみならず、フランスのカトリックをめぐるメディアの言説や戦争の問題を含め、この枢機卿と意見を交換している。1915年9月、再びローマに向かい、親ドイツ的な態度を取る教皇ベネディクト15世に対し、ボードリヤール卿はフランスの教会、政府としての立場を代弁している。以下を参照。Paul Christophe, « Les silences de Benoît XV durant la grande guerre, l'attitude du pape au crible de l'opinion française d'après les *Carnets* du cardinal Baudrillart », *Cardinal Alfred Baudrillart,* Paul Christophe (éd.), Éditions du Cerf, 2006, p. 53–90.

[33] Gérald Antoine, *Paul Claudel ou l'enfer du génie,* Robert Laffont, 2004[1998], p. 140.

[34] 以下の研究は信仰を理由に外務省上層部がクローデルを仲介者に選んだと結論づけている。Jean-Claude Montant, *La Propagande extérieure de la France pendant la Première Guerre mondiale : l'exemple de quelques pays neutres, op. cit.,* p. 118.

[35] 5万フランの補助金が付与された。同時期、プロパガンダ活動を目的として外務省は同額を中立国への代議士派遣に費やしているが、中立国の宗教的感情への対応は任務に明確には含まれていなかった。

[36] Alfred de Baudrillart, *Les Carnets, op. cit.,* p. 147.

[37] Comité catholique de la France à l'étranger (éd.), *La Guerre allemande et le catholicisme,* Bloud et Gay, 1915.

[38] *Théâtre,* t. II, p. 1113–1117.

[39] *Ibid.,* p. 1512.

[40] 1915年2月17日付、ボードリヤール卿の出版社宛(Bloud et Gay)の手紙。フランス国立図書館所蔵、« Dossier Francisque Gay »所収。

[41] 1915年2月22日付、ボードリヤール卿の出版社宛の手紙。*Ibid.*

[42] 「神聖同盟」を体現するあらゆる党派から構成される内閣の誕生はカトリック保守派であるドニ・コシャンが入閣する1915年9月のブリアン内閣発足を待たなければならなかった。聖職者の徴兵の基準変更、バチカンとの国交の問題など、保守派と反教権主義者との間に争いが絶えず、1917年8月のコシャンの辞職は「神聖同盟」の限界を示している。以下を参照。Michel Winock, *La France politique. XIXe–XXe siècle,* Éditions du Seuil, 2003[1999], p. 480.

[43] 1915年3月1日付、ボードリヤール卿宛の手紙。*Ibid.* 1915年2月27日付『エコ・ド・パリ』紙にヒントを得たという。

[44] 写真集では同じ内容が短縮されている。*La Guerre allemande et le catholicisme, op. cit.,* p. 18.

[45] *Théâtre,* t. II, p. 1117. 誤謬表の59条と64条が引用されている。表現の異同はあるものの、写真集とほぼ一致している。*La Guerre allemande et le catholicisme, op. cit.,* p. 21.

[46] 1915年6月、ドイツのカトリック界の著名人が名を連ねる抗議声明が発表された他、ベネディクト16世に陳情書が送付されている。ベルギーでは、ドイツ軍に罰金を科せられる危険がありながらも、冊子の装丁がほどけるほどに広く読まれた。Jean-Claude Montant, *La Propagande extérieure de la France pendant la Première Guerre mondiale. L'exemple de quelques pays neutres, op. cit.,* p. 127.

[47] Yves de Brières, *Luttes de l'Église et Luttes de la Patrie, op. cit.,* 1916, p. 236–242.

[48] 例えば、1915年8月6日、ボードリヤール卿はデルカセ首相との会談の中で10万フランの補助金を要求し、金額の減額はあるものの、承諾されている。1917年2月にはブリアン首相より30万フランの補助金決定の通知を受けている。Alfred Baudrillart, *Les Carnets, op. cit.,* p. 212 et 497.

編集作業はダンピエールやボードリヤール卿に任せた。一方、同時期に書かれた戯曲『1914年』は、写真集『ドイツの戦争とカトリシズム』と共通した主題の元、自分の名前で発表する。身分を使い分けることで可能となるクローデル独自の表現はどのようなものになっているのか、続いて検討する。

2 カトリック詩人が見た戦争：プロパガンダ劇としての『1914年聖誕祭の夜』

2.1『1914年聖誕祭の夜』：梗概と背景

1914年1月半ばより2月初旬[51]に執筆される戯曲『1914年』のあらすじを確認しておこう。舞台は1914年キリスト聖誕祭の夜、シャンパーニュ地方の村で銃殺された司祭が戦死者たちに聖体拝領のミサを捧げる準備をする中、死者たちの間で戦争の意義をめぐる議論が交わされる。午前0時、ランス大聖堂の鐘が鳴る代わりにドイツ軍の砲声が12回轟き、半ば倒壊した大聖堂内で大勢の男女がフランスの救済を願ってグロリア賛歌を歌う。同時期に編集作業が進められていた『ドイツの戦争とカトリシズム』と比較すると、ランス大聖堂の砲撃を取り上げている他、戦争を聖戦とみなすなど、信仰と戦争をめぐる議論をひろく共有している。

ここで、『1914年』の製作の経緯に立ち戻ると[52]、この作品がプロパガンダ目的を有していたことが明らかとなる。1915年1月27日、リュニエ＝ポーに宛てた手紙の中で『1914年』を「時宜にかなった作品」と呼び、15歳以下の俳優が演じることを想定していると語っている[53]。ここでクローデルが俳優の年齢を限定している理由は1915年12月に出版された初版本の表紙に添えられた副題で明示される。副題で「青少年クラブのための一幕劇（Drame pour patronages en un acte）」[54]と作品のジャンルが特定されているのだ。「青少年クラブのための劇」とは、教会の教区の青少年たちに道徳的、宗教的、社会的教育を行う目的、いわば信仰をひろめ、強固なものとするプロパガンダ目的で教会施設において実践され、信者が演者、観客となる[55]。1915年8月以降、友人の教区の青少年クラブで上演する相談を行っており[56]、1917年1月に初演が行われている。したがって、クローデルの『1914年』は特定の集団に訴えかける意図のある作品だとわかる。リュニエ＝ポー[57]が1915年初頭、ロシア、ノルウェー、スウェーデンにおいて、フランスに対する世論を好意的なものにするべく、公的なプロパガンダ任務で演劇の公演旅行を行っていた[58]ことに鑑みると、この友人との交流を通して、演劇による世論の形成の可能性についてクローデルが検討し、『1914年』製作に結びついた可能性は否定できない[59]。

この演劇ジャンルは、登場人物とその台詞を通して「善きカトリック教徒」として敵に対してどのように振舞うべきか、信者が演じることを通じて学び、また、観客である信者に模範を提示する性格を有していた[60]。実際、クローデルの『1914年』は、演じる人間たち、または観客が戦争を理解するのを助け、それぞれが意義を考えるよう促すものであった。1917年1月、『1914年』を初演した劇団シャンティエの監督ポワヴレル師はジャック役を演じた負傷兵とのやりとりを明かしている。

> 「神父様、私の台詞の中で言わなければならないと感じる言葉があるのです。」――「なんだって？」――「『私の魂は純粋で罪の汚れがない』。私はそのように自分で感じるために、また、言う価値があると思うのでそう言いたいのです。」[61]

一人の兵士であると同時に信者でもある青年は、登場人物と自分を重ね合わせ、自分が戦争で戦った意味をクローデルの『1914年』を通して熟考した。フランスが当時置かれていた状況を丁寧に設定に盛り込んだ「時宜にかなった短い劇」[62]は、フランスのカトリック教徒が戦時中に取るべき模範を示す、プロパガンダとしての役割を有していたといえるだろう[63]。以下、このプロパガンダ劇がフランスのカトリック教徒に対して伝えようと試みる戦争観について、詳しくみていく。

2.2 敵の表象：「野蛮」なドイツと「不敬虔」なフランス

『1914年』では、先述のプロパガンダ出版物と同様、ドイツ人は野蛮で無慈悲な「悪」の体現者として描かれる。グリフィスは、『1914年』は敵を過度に中傷するために、構造が過度に単純化され、観客は劇中で提示される問題について適切な判断ができないと批判する[64]、「青少年クラブのための劇」においては、素人である演者と観客が善悪の判断をつけやすいよう、善悪の対立を明確にして構造を

[49] 外務省は1916年6月23日、フランスのカトリック教徒の戦争観を提示するフランスの著名人の手による記事をアメリカの45の新聞の一面に毎月発表する編集任務をボードリヤール卿に依頼している。この任務はポワンカレ大統領、ブリアン首相も関知していた。*Ibid.*, p. 384 et 497.

[50] とはいえ、クローデルは広報部を離れた後も、外国のカトリック教徒におけるフランスの印象を常に気にかけており、ブラジル滞在時の1917年4月、ブラジル人聖職者における対仏、対独感情の違いに関してボードリヤール卿に報告している。Paul Claudel, « Lettres inédites à Alfred Baudrillart » *Revue des deux mondes*, Christophe Langlois (éd.), janvier 2013, p. 33.

[51] *Journal,* t. I, p. 305.

[52] 先行研究では作者自身が明示している劇のジャンルに目が配られていない。

[53] *Claudel homme de théâtre. Correspondance avec Lugné-Poe,1910–1928,* notes de René Farabet, *Cahiers Paul Claudel,* n° 5, Gallimard, 1964, p. 167.

[54] Paul Claudel, *La Nuit de Noël 1914,* L'Art catholique, 1915.

[55] Philippe Gabillard, « Une pédagogie para-scolaire pendant l'entre-deux guerres : les pièces de patronage », *Annales de Bretagne et des pays de l'Ouest,* t. 97, n° 1, 1990, p. 63.

[56] *Chronique du Journal de Clichy. Claudel-Fontaine, Correspondance,* François Morlot et Jean Touzot (éd.), Belles Lettres, 1978, p. 148.

[57] リュニエ＝ポーはフランスにおけるイプセンの紹介者として知られる。

[58] 1914年11月、戦争省とリュニエ＝ポーの間に立ち、この仕事を政府のプロパガンダ活動の一貫にしたのはクローデルの功労である。また、北欧諸国にクローデルが執筆したプロパガンダ冊子を普及させる際、リュニエ＝ポーの人脈を利用している。*Claudel homme de théâtre, op. cit.,* p. 166.

[59] 1917年、クローデルは、イタリア、スペインをはじめとするカトリック国でフランスを代表とするカトリック作家として人気があることをリュニエ＝ポーに報告している。両者の間で文化的プロパガンダの議論がなされていた証左といえる。*Ibid.,* p. 170.

[60] Philippe Gabillard, « Une pédagogie para-scolaire pendant l'entre-deux guerres : les pièces de patronage », art. cit., p. 62.

[61] *Chronique du Journal de Clichy, op. cit.,* p. 152.

[62] *Journal,* t. I, p. 305.

[63] 初演には、ボードリヤール卿の他、カトリックプロパガンダ委員会の協力者であるパリ大司教アメット卿も立ち会った。1917年の初演後、他の教会も上演許可を求めたとの証言がある。*Chronique du Journal de Clichy, op. cit.,* p. 158.

[64] Richard Griffiths, *Révolution à rebours. Le Renouveau catholique,* Desclée de Brouwer, 1971, p. 91.

わかりやすくすることが求められていたため、グリフィスのこの批判は不当である。

『1914年』でドイツ人は人間の姿をとらず、大砲の音や登場人物の台詞中で示される暴力によってのみその存在が表される。ドイツ人の手により亡くなった登場人物の会話をみてみよう。

> 幼い少女:「ちびっこたちはみんな死んじゃった。だってバイエルン人が牛乳を全部没収したから。」[…]
> 幼い少年:「ドイツ人は僕を撃ち殺した。ぼくが木の銃で狙ったから。」[…]
> 幼いマリー:「納屋で焼かれたのはベルギーのちびっこ達だ。あの子達の学校に砲弾が一発落ちて、修道女さまと一緒にみんな一息にぶっ飛んじゃった。」[65]

クローデルは、『ドイツの野蛮』と同様に、ハーグ陸戦条約に違反する、ドイツの残虐行為を劇中に再現している。1914年8月以降、複数の雑誌や新聞に掲載された「木の銃」を構えたために殺された少年の逸話[66]が喚起されることで、『1914年』が同時代の戦争を問題としていることがより明確となる。更には、洋菓子のババロワと掛け合わせながら、「バイエルン人が[ババロワを作ろうと]牛乳をすべて没収した」ために赤ん坊が皆亡くなったという、ドイツ軍の略奪行為に言及する一節は、ユーモアを通り越した残酷さが込められ、クローデルは犠牲の不条理さを強調している。

ところで、資料や証言を端的に提示することに重きが置かれるプロパガンダ文書とは異なり、『1914年』は、司祭の台詞を通じて、残忍性の由来に関する解釈が展開される。司祭は世界の統一を謳うカトリック教会から離反する企てとしてのプロテスタンティズムを「主観的傾向」と評し、その傾向に依拠した、カントやニーチェをはじめとする哲学者を「闇を吹き込む者」とみなし、プロテスタンティズムとドイツ哲学を断罪する[67]。それ故、戦争におけるドイツの「野蛮」な行為は、物理的攻撃のみならず、霊的攻撃と同義とされ、「フランスのキリスト教揺籃の地」であるランス大聖堂の砲撃はその攻撃の二面性を象徴する。

しかし、そのような反カトリック的要素はドイツ本国のみに見出されるわけではない。『1914年』ではドイツ哲学に「汚染」されたフランス哲学とその支持者も敵とみなされ、この点もまた、外務省主導のプロパガンダには見られなかった要素である。1858年、エルネスト・エローがルナンの無神論的思想にドイツ哲学の影響を見て取るのを皮切りに[68]、フランス思想と大学教育のドイツ化を憂う者も少なくはなく、クローデルも論客の一人であった。カトリック論者においては、開戦後、ドイツ哲学の流行は戦争準備として戦前から始められていた汎ゲルマン主義のプロパガンダとみなされ[69]、ドイツ軍の野蛮な攻撃はドイツ思想をもてはやしたフランスが己のあやまちを認めざるを得ない機会とされた。青年時代、ルナンの著作の影響で信仰を一度失ったと考えるクローデルの目には、ルナンの孫であるエルネスト・プシカリ[70]のカトリックへの改宗と戦死はドイツに入れ込むフランスの「大罪」を贖うものとして映っており[71]、『1914年』でクローデルは司祭の台詞の中でプシカリの例を挙げ、その犠牲の意義を強調する[72]。

『1914年』において、ドイツの攻撃に関する批判は、フランス内部に侵入するドイツ的要素へと向けられるのみならず、「不敬虔」なフランスにも向けられる。「彼ら[ドイツ人]が我々[フランス人]を殺したとき、[…]これらの善良な人々に度を越えた行為を強いた困窮の責任は我々にあった。」[73]という司祭の台詞は、フランスの「不敬虔さ」がドイツの野蛮な行為の元凶のうちに含まれることを示す。司祭は先の引用の「善良な人々(bonnes gens)」の他、「信仰の篤い国民(peuples religieux)」、「敬虔な人間(pieuses gens)」等、単語を変えながらドイツ人に敬虔さを付与する一方で、プロテスタントの信仰のあり方をこれ見よがしなものとして表し[74]、その「敬虔さ」を皮肉っている。だが、ここで司祭がドイツの「敬虔さ」以上に問題視するのは、宗教改革以降、ドイツがプロテスタンティズム、物質主義を基礎にした帝国を形成していた隣でフランスが何をしていたのかという点である。

> 哀れなフランスよ、ああ我が愛しき同輩達よ、このとき、ああ神よ、フランスは何をしているのか? そのことを考えると恐怖に慄く。これほどまでに模範にならない国だとは[75]!

第三共和政下のフランスが「ヴォルテールとルナンの国[76]」と呼ばれるほどに神から離れ、「堕落」し、不敬虔であったために、戦争の勃発には神意が働いていると『1914年』の司祭は訴えているのだ。この点は、ドイツが中立国に対して行っていたプロパガンダの言説と一致する。

このように、『1914年』でクローデルは、ドイツのみならず、「不敬虔」なフランスをも批判対象とした。公務員という立場では困難を伴うであろうフランス批判は「青少年クラブのための劇」というジャンルを選択したからこそ可能となったといえる。なぜなら、このジャンルでは教会を迫害するフランス革命と反教権的な共和国がしばしば「敵」の表象を帯び、批判の対象とされてきたためだ[77]。作品の対象が教会に

---

[65] 下線引用者。*Théâtre,* t. II, p. 76–77.
[66] *Bulletin des Armées de la République,* 18 août 1914, p. 2 ; *Le Matin,* 18 août 1914.
[67] *Théâtre,* t. II, p. 86.
[68] Ernest Hello, *M. Renan, l'Allemagne et l'Athéisme au XIXe siècle,* Douniol, 1858.
[69] Alexandre Pons, *La Guerre et l'Ame française,* Bloud et Gay, 1915, p. 137.
[70] Ernest Psichari (1883–1914) : 20歳で植民地軍に入隊し、コンゴとモーリタニアに赴く。1913年、詩集『呼集』*l'Appel des Armes*を発表。同年、ギリシャ正教からカトリックへ改宗。聖職者としてドミニコ会に入会することを考えるが、最終的に軍人の道を選ぶ。1914年8月22日にベルギーで戦死。
[71] Paul Claudel et Jacques Rivière, *Correspondance,* 1907–1924, Auguste Anglès et Pierre de Gaulmyn (éd.), *Cahiers Paul Claudel,* n°12, Gallimard, 1984, p. 213.
[72] *Théâtre,* t. II, p. 84.
[73] *Ibid.,* p. 82.
[74] 「我々[カトリック教徒]が恐れ多くて発せない四番目の子音[=YHWH]を口に出さずにはいられない[=旧約聖書の教えに反して神の名をむやみに援用する]」、「祈祷台に跪いている姿を写真に撮らせ」る国民であるとし、戦時中にドイツで繰り返されたスローガン「神は我々とともに!(Gott mit uns !)」に端的にあらわれるドイツ人の信仰のあり方を批判している。*Ibid.,* p. 82.
[75] *Ibid.,* p. 82–83.
[76] *Ibid.,* p. 84.
[77] Philippe Gabillard, « Une pédagogie para-scolaire pendant l'entre-deux guerres : Les pièces de patronage », art. cit., p. 70.

通う信徒であることを鑑みると、ドイツの反仏プロパガンダと同じ問題意識を敢えて作品中に埋め込み、「不敬虔」なフランスを敵とすることで、逆境の中で信仰を守り続けるフランス人信徒を肯定し、激励するクローデルの意図があったと考えられよう。

2.3「聖戦」を通したフランスの「回心」

第一次世界大戦を宗教的文脈で捉えるヴィジョンは、フランスのプロパガンダが「上」から市民に押し付けたものというよりは、当時、広く共有されていたヴィジョンをプロパガンダ制作者が取り入れたと言った方が正確である[78]。この戦争は開戦当初より、愛国心、反独感情と堅く結びつきながら、多くのフランス人の信仰心を刺激し、目覚めさせた[79]。「神聖同盟」の実現に苦労した政界に比べ、国民のレベルにおいては戦争と信仰はより容易に「神聖な結びつき」をみせていたといえる。また、この「聖戦」観は軍隊の構成にも起因するものである。第一次世界大戦において聖職者は高い存在感を示しており、数多く徴兵された上、戦場ではカトリック、プロテスタント、ユダヤ教の各聖職者が礼拝を執り行われていた[80]。アンリ・ゲオンの回心の回想録[81]が象徴するように、第一次世界大戦は兵士の各々の心の内に信仰心を呼び戻したり、改宗に至らせた事例が数多くあった。

クローデルは『1914年』において、前線における「神聖な結びつき」を取り上げ、聖職に関わりのある人物を舞台上に複数登場させる。第一場に登場する伍長はマレーシアで司教をしていた聖職者であり、戦死するジャンは神学生である。フランス軍が神を擁護する「砦」に喩えられる中で、三色旗のイメージが喚起される。

> 砦、この堅牢な砦には彼［＝神］が国のなかにもつあらゆる人間が編み込められ、この収穫には司祭と宣教師が私達と一緒にすっかり混ざり合って、まるで赤い花と青い花が白く輝く麦畑に咲くかのよう[82]！

兵士と聖職者は精神的にも「すっかり混ざり合」い、聖職者は共和国の構成要素として不可欠のものとして表される。当然のことながら、プロテスタントやユダヤ教への回心もありえたであろうが、『1914年』ではすべてカトリックへの回心として描かれ、観客は、戦場で科学を体現する医者がロザリオの祈りを捧げる姿、ユダヤ教のラビが瀕死の兵士に十字架を口付けさせる姿を目にする[83]。個人の信条の違いが解消され、フランスが一致団結していることの象徴として、カトリシズムへの改宗、回心のモチーフが用いられているのだ。

カトリックをめぐるフランスの状況が第一次世界大戦を機に変化することへの作者の期待は、戦死したジャックが公立学校の教師であった点にも見出すことができる。1913年、クローデルは「公立学校の失敗」という題目で匿名記事を書いており、公立学校の教育に大いに関心を抱いていたからだ。1905年の政教分離法成立により、「我々［＝フランス人］のうちで最も純粋で高貴なる修道士と修道女たち[84]」が国外へ追放されたことに憤りを禁じえないクローデルは、この法律によるモラルへの影響を憂慮する。キリスト教精神に拠らない教育を受けた公立学校の教師が十分なモラルを有し、かつ、子供の情操教育を適切に行えるのかという点をクローデルは特に気にかけていた[85]。

そこで、クローデルは『1914年』の中で公立学校の教師をカトリックへ回心させることでこの問題を解決する。元教師ジャックは神学生ジャンを思いやるあまり同時に同じ砲弾で命を落とした。十分なモラルを有していたジャック、或いは自己犠牲を以って十分なモラルを有することを証明したジャックは犠牲の瞬間にカトリックへの回心を遂げる。モラルの高さがカトリック教徒を特徴づける要素として位置づけられていることがここから明らかである。フランス人兵士らの勇敢な犠牲は「堕落」していたフランス人のモラルの成長をも意味し、それは、各々の信仰の有無、その種類に拘らず、フランス全体の成長につながることが示されている。

また、第一次世界大戦でフランス人が払う犠牲に関して、クローデルは従来の殉教の概念を拡大してみせる[86]。『1914年』の戦争が「悪魔とともにいるルターという彼ら［ドイツ人］の父に対抗して[87]」神を擁護するために展開される聖戦である以上、自らの命を神に差し出す兵士は「殉教者」とみなされる。更に、クローデルの代弁者である司祭は、自らの意志ではなく命を奪われた子供たちをも殉教者に含め、次のように慰める。

> あなた方は聖なる者でもあります。あなた方はどんなに幼くても、多数の高潔な殉教者、宣教師、中国またはローマ時代の同胞たちが数多くの困難と忍耐によって獲得したのと同じ幸福の冠を得ています。神の恩寵の状態にある人は常にキリストに一致しているので、殉教するようなことがあればその人は常に創造主に結ばれた状態にあり、キリストと同じ受難に与り、周りのすべての者に償いと贖いの効力を及ぼすのです[88]。

キリストがアダムとイヴの原罪に汚染された現世を浄化し、罪を消滅させるために生贄として全人類に捧げられたのと同じく、無実の者の善行や苦しみによって罪人の罪が贖われるのと同様に、第一次世界大戦で「神の恩寵」を受けた殉教者はキリストの受難を追体験す

[78] Annette Becker, *La Guerre et la foi. De la mort à la mémoire, 1914–1918,* Armand Colin, 1994, p. 16.
[79] 聖母マリア、聖女ジュヌヴィエーヴ、ジャンヌ・ダルク等、フランスにゆかりのある聖人に平和への祈りを捧げる勤行や巡礼が流行した。*Ibid.,* p. 69–76.
[80] アルベール・ド・ムン師と『エコ・ド・パリ』紙によるキャンペーン活動を受け、1914年8月10日、前線に志願司祭館（aumônerie volontaire）を設置することに政府は合意し、続いて1914年11月12日には政府から各司祭館への日当の支給が決定された。ここに「神聖同盟」実現のための政府の教会への歩み寄りをみることもできるであろう。
[81] Henri Ghéon, *L'Homme né de la Guerre,* Éditions de la NRF, 1919.
[82] 下線引用者。*Théâtre,* t. II, p. 86.
[83] *Théâtre,* t. II, p. 84.
[84] *Chronique du Journal de Clichy, op. cit.,* p. 34.
[85] « La faillite de l'école laïque », *Ibid.,* p. 38–51.
[86] 栗村道夫『ポール・クローデルの作品における聖徒の交わり』サンパウロ出版、2000年、344–346ページ。
[87] *Théâtre,* t. II, p. 86.
[88] 下線引用者。*Ibid.,* p. 82.

る。クローデルは「功徳の相互補完性」の概念を持ち出し、戦争で命を落とすことは先代の「高潔な殉教者」と同じ栄誉に与る喜ばしいことだとして、犠牲者とその家族を慰める。元教師で「殉教者」であるジャックによれば、フランスはもはや「神の敵」[89]ではない。「神が我々を護ってくれる」と主張する受動的なドイツ人と比べ、「神にのみ従事し」、自分たちが「神を護る」フランス人は神に対して能動的な国民である。犠牲の瞬間に回心したジャックが、フランスの戦争における使命を認識し、フランスのカトリック性を説くほどまでの篤い信仰心を披露するこの場面に、フランスが反教権的な体制に終止符を打つことを望む教会の声の代弁を見て取ることが可能である。

2.4 愛国主義とカトリシズムの拮抗

前節でみたように、『1914年』でクローデルが同時代のカトリック教徒に対して提示するフランスの使命とは、長らく伝統として占めていた「教会の長女」の座を取り戻すことである。この考えは同時代の愛国主義者、カトリックの聖職者のそれと共有されるものであるが、クローデルが「教会の長女」の復権を願うとき、バレスやモーラスの、カトリシズムをフランスの伝統と同一視する愛国主義とは異なる意図が見出される[90]。ナショナリズムの称揚はカトリック教徒の分裂につながりかねないとの批判をボードリヤール卿が受けていたように[91]、フランス固有の宗教的特異性を主張することは世界の統一を謳うカトリシズムの概念に反する危険もある。このナショナリズムとカトリシズムの拮抗を乗り越える際、クローデルが持ち出すのは他者への志向と連帯である。

『1914年』で、ドイツ軍の行為に苦しむのはフランス人だけではない。クローデルは当時の戦況を作品に反映させ、中立国のベルギー人、連合国のイギリス人の子供を登場させる。更には、近い将来、連合国側に付くことを願って、オーストリアやセルビアの子供の存在にも触れられている[92]。ミサを待つ死者のうち、子供たちはなぜ自分が死んだのか知らないのに対し、フランス人であるジャックとジャンは成年で、自分の犠牲の意義を知っている。また、亡くなった子供たちを慰めるのはフランス人の司祭である。年齢と認識の違いは「教会の長女」としての意識を反映させているといえよう。なぜなら、『1914年』のジャックによれば、「フランスは喜びをもたらすために、全世界のために生まれた。フランスが擁護するのは自国の命のみではない。全世界に及ぶ神のみ言葉を[…]守るのだ。」[93]と、フランス人は全世界の利益を考える国民と定義されるためだ。クローデルが『1914年』で、聖職者のなかでも特に宣教師を区別して描き出す理由も同様の考えに基づく。外国の異教徒の救済を目的とする宣教活動におけるフランス人宣教師の活躍[94]はフランスの他者への思いやりの証である。『1914年』のフランス人兵士はドイツの罪だけでなく、「不敬虔」なフランス、更には全世界の罪をも贖い、平和をもたらすために殉教するのだ。この普遍性への志向にこそ、『1914年』を、自国の利益のみを求めるナショナリズムの批判から峻別する論拠を認めることができる。開戦以前より、「ナショナリストである前に『カトリック者』である」と自らを定義するクローデルは、チェコ人の翻訳者に対して、戯曲『マリアへのお告げ』中のフランス固有の偉人や地名を、翻訳される言語に応じてその国独自の固有名詞に変更することを許可している[95]。クローデルの作品にあらわれる各国の宗教的特異性は、詩人のナショナリズム感情が高揚した結果というよりも、作品が対象とする観客の作品理解を易しくするための道具として用いられていることに注意しなければならない。故に、『1914年』におけるフランス固有の愛国主義的要素は、フランス人信徒である俳優、観客の作品理解や共感をより容易にするために配置されているのであり、『1914年』を単純に愛国主義的作品と評価するのは誤りである。

『1914年』で示されたナショナリズムとカトリシズムの折り合いの付け方と同じ議論をクローデルはその後も展開する。1925年、ヨーロッパ諸国の協調を志向した「ヨーロッパ連盟」に関するインタビューで、クローデルは祖国への愛着を認めつつ、ドイツに代表される「祖国へのナショナリズムの度を越した熱狂」は人類に対する「罪」であると答える[96]。このカトリック詩人には、ナショナリズムよりも「人間の救済のために国家の違いをこえて鳴る天のあのアンジェラスの鐘」[97]を世界にひろく鳴り渡らせることが重要である。『1914年』は、開戦から間もない時点で、フランス人のカトリック信徒に対して、過度の愛国主義を諌め、「全世界的な共同体に忠節を尽くす」[98]、カトリシズムに依拠した意識を持つように呼びかける平和への祈りがこめられている。祖国の防衛のみならず、他国民の救済も可能にするものとして描かれる『1914年』のフランス人の信仰は、教会に通い、教区の活動に参加するフランス人信徒の信仰心をいっそう鼓舞するのだ。

おわりに

先述のように、クローデルは己の信仰を公にすることに慎重な態度を取っていた。1913年7月、とある聖職者の数度にわたる要請により回心の回想録執筆を引き受けた際もまた、個人的な心的体験を黙秘したいと願う「慎ましさ」と、信仰者としての義務感の間で葛藤したと複数の友人に打ち明けている[99]。その後、回想録『私の回心』(*Ma conversion*)[100]が反響を呼ぶにつけ、「慎ましさ」を犠牲にして、カトリック詩人として声を上げることの必要性と義務感を感じていた。1913

[89] *Ibid.,* p. 85.
[90] 以下を参照。Richard Griffiths, *Révolution à rebours, op. cit.,* p. 262–265.
[91] Alfred de Baudrillart, *Les Carnets, op. cit.,* p. 169.
[92] *Théâtre,* t. II, p. 77.
[93] *Ibid.,* p. 86.
[94] 19世紀末、世界各地に派遣される宣教師の約3分の2がフランス人であった。Louis-Eugène Louvet, *Les Missions catholiques au XIXe siècle,* Lille, Desclée de Brouwer et Cie, 1898, p. 414.
[95] *Prague,* Václav Černý et Paulette–Françoise Enjalran (éd.), *Cahiers Paul Claudel,* n° 9, Gallimard, 1971, p. 154.
[96] Paul Claudel, *Supplément aux Œuvres Complètes,* t. II, *op. cit.,* p. 123.
[97] *Id.*
[98] *Id.*
[99] Paul Claudel et André Gide, *Correspondance, op. cit.,* p. 200 ; *Chroniques du Journal de Clichy, op. cit.,* p. 129 ; Paul Claudel, Gabriel Frizeau et Francis Jammes, *Correspondance, 1897–1938,* annotés par André Blanchet, Gallimard, 1952, p. 263.

年11月、同じく、回心の回想録を発表したガブリエル・フリゾーに対し、自分たちの回想録が役に立つことを祈りつつ、「[神の]御光が隠れないよう」、回心者であり作家である自分たちは「話すという絶対的な命令を[神から]受けている」ことを確認している[101]。

本論でみてきたように、第一次世界大戦は、クローデルに同時代の信仰について「話す」ことを求めるまたとない機会であった。公務員としての立場に細心の注意を払いつつも、信仰にまつわるプロパガンダ戦に深く関与し、国際社会の平和実現の方法としてカトリシズムの重要性を説くクローデルの姿には、本論前半部で検討したような、外交官の職務とカトリック詩人との乖離を持て余していた様子はもはや見られない。1921年、駐日フランス大使着任時に「詩人大使」と呼ばれたクローデルの文化的武器としての「公」の任務は第一次世界大戦開戦直後から始められていた。あらゆる場面設定に第一次世界大戦の刻印が残る1919年執筆開始の『繻子の靴』の主人公、世界をひとつに集めるため、いわば全民族の連帯を実現するために、ヨーロッパを代表して世界各地に赴く「使者(ambassadeur)」ロドリーグには作者自身の戦争体験が反映されるのだ。

フランス語要旨 *résumé*

Paul Claudel et la Première Guerre mondiale

Les activités de propagande et *La Nuit de Noël 1914*

UESUGI Mio

Paul Claudel (1868-1955) est resté éloigné de l'expérience directe des combats durant la Première Guerre mondiale. Selon Christopher Flood, auteur de *Pensée politique et imagination historique dans l'œuvre de Paul Claudel,* la pensée claudélienne de la Guerre, exprimée dans des œuvres littéraires rédigées à la même époque, telles que *Poèmes de Guerre et La Nuit de Noël 1914,* a été souvent considérée par les chercheurs comme trop schématique et cocardière. Cependant, il convient d'attribuer cette schématisation aux activités diplomatiques du poète.

En fait, Claudel était au vrai « front » de la Première Guerre mondiale, celui de la guerre de propagande : après avoir quitté son poste à Hambourg à la suite du déclenchement des hostilités, le diplomate a reçu la mission de rédiger des tracts pour dénoncer les atrocités allemandes ; en février 1915, dans un projet de publication de propagande destinée aux catholiques dans les pays neutres, il a servi d'intermédiaire dans le rapprochement de l'État et de l'Église ; au printemps 1915, il a été envoyé en Italie « en tournée de propagande », en tant que poète, pour un cycle de conférences intitulées « Poème de la Foi, de la Nature et de la Patrie », dont le but consistait à convaincre les Italiens de la nécessité de participer à la Guerre en s'alliant avec la France ; pendant son séjour au Brésil en tant que ministre plénipotentiaire de 1917 à 1918, il s'est engagé dans des activités de propagande afin d'influencer l'opinion du Brésil en faveur de la France. Durant toute la Première Guerre mondiale, ses activités professionnelles de diplomate lui ont permis de s'approprier une vue globale de cette guerre, et de prendre conscience du rôle spirituel que la France devait jouer dans cette crise exceptionnelle.

Cet article vise ainsi à reconsidérer certaines empreintes laissées par sa mission diplomatique sur ses œuvres littéraires en prenant comme exemples les œuvres de propagande et celle intitulée *La Nuit de Noël 1914* qui ont été rédigées au même moment, au début de l'année 1915. Si l'on compare ces œuvres qui situent la Première Guerre mondiale dans un contexte fortement religieux et patriotique, on perçoit non seulement les rapports directs qu'entretiennent ses deux types d'activités diplomatiques et littéraires, mais aussi certains détails qui témoignent du souci minutieux de Claudel de ne pas compromettre son statut professionnel même lorsqu'il œuvre pour le rapprochement de l'Église et l'État en ces temps de crise exceptionnels.

L'examen de la genèse de l'album de propagande *La Guerre allemande et le catholicisme,* ignorée dans les recherches claudéliennes, révèle dans quelle mesure Claudel a participé à la rédaction restée jusqu'à ce jour inconnue, et avec quel soin il établit une distinction entre sa foi de catholique et son métier de fonctionnaire de la République laïque. Cette publication de propagande vise à riposter à la campagne de l'Allemagne, qui est parvenue à retourner l'opinion publique dans les pays catholiques contre la France « athée » et anticléricale, persécutrice du clergé par la loi de Séparation de 1905. Le statut laïque du gouvernement français l'empêchant de diffuser la propagande religieuse par lui-même, le Quai d'Orsay décide de fonder le « Comité catholique de propagande française à l'étranger », en tenant secret la participation de l'État et en en confiant la rédaction à Mgr Alfred Baudrillart. Le propos de celui-ci, alliant patriotisme et catholicisme dans des conférences et dans la presse chrétienne, est conforme à l'intention du projet de propagande. En outre, parce que ce religieux est un des confesseurs de Claudel, le gouvernement choisit le diplomate catholique comme médiateur pour réaliser une véritable « Union sacrée ».

Cette occasion d'une réintégration dans l'État de l'Église persécutée devait tenir à cœur à Claudel, ce catholique, toujours soucieux de l'avenir de l'Église. Cependant, chose remarquable, sa participation à la rédaction est restée partielle dans l'album en question. *La Guerre et la foi,* ébauche de *La Guerre*

[100] Paul Claudel, « Ma conversion », *Œuvres en prose,* Jacques Petit (éd.), « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, p. 1008–1014. 初出は以下の通り。*Revue de la jeunesse,* 10 octobre 1913 ; *Semaine littéraire,* 19 octobre 1913 ; *Durandal,* novembre 1913.

[101] Paul Claudel, Gabriel Frizeau et Francis Jammes, *Correspondance, op. cit.,* p. 263.

allemande et le catholicisme, conservée dans les archives personnelles de Claudel, et les témoignages de Mgr Baudrillart nous révèlent que le texte de cet album a été écrit par un autre collaborateur, archiviste renommé, Jacques de Dampierre. Notre auteur l'a révisé, donné des conseils et fourni des informations utiles à Mgr. Baudrillart, mais il n'a jamais pris l'initiative de cette publication.

Pourtant, cela ne signifie pas que la réhabilitation de l'Église au temps de la Guerre n'ait pas suscité d'intérêt chez Claudel. En effet, ses lettres privées nous apprennent que Claudel lui-même considérait la Première Guerre mondiale comme une guerre sainte. De même, l'argument de sa *Nuit de Noël 1914* s'accorde avec celui de *La Guerre allemande et le catholicisme* : ces deux textes développent l'idée que les Allemands « barbares » font la guerre au catholicisme en agressant atrocement la France et la Belgique, et que Dieu est du côté de la France et des pays catholiques. En outre, le genre de *La Nuit de Noël 1914,* « drame pour patronages » indiqué dans son sous-titre, signale que notre dramaturge a l'intention de créer une œuvre de propagande pour des spectateurs spécifiques, ceux de ses contemporains fidèles catholiques, en vue d'encourager leur foi.

Certaines particularités de ce drame dont la structure et les personnages sont souvent critiquées dans les études claudéliennes comme trop simplistes et cocardiers, pourraient se justifier par le genre dont il relève : « drame pour patronages », théâtre éducatif ayant pour but une formation morale et religieuse des jeunes fidèles. Le contraste remarquable que ce drame expose entre les Allemands et les Français, entre les « souffleurs de ténèbres » et les « défenseurs de Dieu », et leur positionnement conflictuel correspondent parfaitement aux règles du « drame pour patronages » où la distinction entre le bien et le mal doit toujours être facile à faire pour le jeune spectateur. De plus, avec des détails caractérisant la scène et les personnages, Claudel reproduit fidèlement les circonstances de la fin de l'année 1914 en tirant parti de ses connaissances acquises grâce à ses missions au Quai d'Orsay, de sorte que le spectateur catholique puisse s'identifier facilement à la scène et comprendre exactement comment il doit réagir à cette guerre.

Claudel va plus loin. Malgré sa prudence dans la manifestation de sa foi en public, la parution du récit de sa conversion à l'automne 1913 et le déclenchement de la Guerre l'ont poussé à assumer la tâche d'écrivain catholique. Il représente dans *La Nuit de Noël 1914* ce qu'il n'a pu exprimer en tant que fonctionnaire d'État : par la bouche du Curé d'un village, Claudel stigmatise la France anticléricale ; un des soldats français, converti au moment de son martyr, annonce la régénération de la France comme « Fille aînée de l'Église » ; les personnages croient à l'avènement de la paix par une conversion au catholicisme qui repose sur l'idée de l'unité du monde et de la solidarité. Le dramaturge met en lumière la transformation de la France en fournissant des preuves contraires aux propagandes anti-françaises menées par l'Allemagne.

Insister sur le rôle propre et traditionnel de la France catholique chez les Français peut se lire comme une sorte d'un discours nationaliste, de même que celui de Barrès et de Maurras. Pourtant, il est possible de distinguer le propos de l'Action Française avec celui de Claudel, la réalisation de la paix basée sur la solidarité des pays européens. Par conséquent, dans son œuvre, les particularités religieuses de la France servent purement au public français à faciliter sa compréhension du sujet et à y apporter le goût de terroir.

Ainsi *La Nuit de Noël 1914* se présente-t-elle comme un véritable théâtre de propagande destiné aux fidèles, lesquels souffrent d'un grande vide devant l'énormité de la catastrophe et ont besoin de comprendre ce qu'elle peut bien signifier. Mettant à profit son double statut selon les circonstances, Claudel prend les moyens les plus efficaces pour influencer l'opinion publique en faveur de son pays et de sa foi. La Première Guerre mondiale, la guerre « sainte » à l'époque contemporaine, a donné lieu à Claudel de se charger de « poète-diplomate » qui propage dans le monde entier le catholicisme, une solution de réaliser la paix.